【論文】

「二分化された日本語」の問題
学習者が語る「日本語」の意味に注目して

鄭京姫*

概要

本稿は，一人の学習者が語る「日本語」の意味に注目し，その「日本語人生」を追ったものである。日本語学習者が語る「日本語」の実態から，日本語を学ぶことに対する意識を始め，言いたいことがあっても言えず，悩んでいるというコミュニケーションの問題がわかった。特に，コミュニケーションにおいて自分らしさを感じることができない「二分化された日本語」の問題が明らかになり，日本語教育において「自分の日本語」という概念が必要であることが示唆された。

キーワード

日本語学習者，日本語，ライフヒストリー，インタビュー，コミュニケーション

1. はじめに

「学習者中心」「学習者主体」という教育用語が一般的になっていることからもわかるように，「学習者のためのコミュニケーション」が日本語教育の中で重視されるようになってから久しい。しかし，学習者一人ひとりの「個人」に注目し，彼らのコミュニケーションの問題や，悩みなどの実態を明らかにした研究はほとんど見られず，研究は日本語教育学や日本語教師側の視点に留まっている。そのため，日本語学習者の「声」を丁寧に聞いていくことの必要性を感じ，社会学・人類学・社会言語学におけるライフヒストリー法を用い，「日本語ライフヒストリー研究」[1]という枠を立て，インタビューを行い，その内容を考察した。

本稿では，その「日本語ライフヒストリー研究」で出会った，一人の学習者が語る日本語に注目し，そこに示唆された意味を解き明かすことを目的とする。

2. 研究方法と概要

2. 1.「日本語人生」を聞く

本稿で使用する「日本語人生」とは，学習者の日本語学習歴を始め，日本に来てからの生活の現状と感想，コミュニケーション上感じたことなど，彼らが日本語を使用して実際に生活を営んできたこと全てを含む。筆者は，学習者が日本語を学び始めた「あの時」から「いま - ここ」に至るまで，つまり，日本語学習のきっかけからその後の学習過程など，学習者一人ひとりの物語がどのように進んできたのかをライフヒストリー法を用い，

* 早稲田大学大学院日本語教育研究科
（E メール：hime_0404_4@yahoo.co.jp）

1 日本語学習者の「日本語人生」をインタビューから聞き，そしてその中で日本語教育のあり方を考察する研究であるため，筆者自身は，それを「日本語ライフヒストリー研究」であると位置づけている。なぜなら,「ライフストーリー」は一つ一つの断片的なエピソードが重視される一方,「ライフヒストリー」は，その人の人生を包括的に書き上げ，その人の個人史がどのように形成されていったのを捉えることができるからである。なお，大久保（2009）が,「ライフヒストリー」と「ライフストーリー」の異同は明確でなく，異同をはっきり意識し使う人もいれば，そうでない人もいると指摘しているように，類似した概念ではあるが，筆者は語りをどう位置付け，解釈するかの立場の違いなのではないかと考える。

「日本語人生」という枠を立て，インタビューを行うことにした。ライフヒストリー法を用いた理由は，学習者が語る意味を解き明かすのは「あるテーマを聞くのではなく，個人に注目し，その人の人生を含めて聞くこと」（中野，桜井，1995）が必要だと考えたからである。

インタビューの形としては，ライフヒストリー法におけるナラティブインタビューを用いた。ナラティブは，「インタビュイーの経験世界に迫り，語り手の主体性を重んじ，語り手が自由な語りの生成過程を促す方法」（やまだ，2007，p.130）であるとされる。つまり，調査者の関心に沿って語られるのではなく，インタビュイーによって語られていくことから本インタビュー法を採用するにいたった。さらに，「ナラティブ生成質問」[2]を用いたインタビューを試みた。インタビュイーの募集段階で配布した「インタビュー依頼書」には「日本語人生」を語ってもらう研究と記した。しかし，録音機を前にして不安を覚えてしまう可能性もあると考え，それを解決できるように，また，インタビュイーが自由に語れるように，以下のような「ナラティブ生成質問」を設けた。

> あなたの日本語人生がどのように進んできたのか。日本語を始めたきっかけや学習，また来日して生活の中で起きたエピソードなど，これまでのことをお話しください。

インタビューは，この生成質問から開始することはせず，雑談を交えた会話から始め，インタビュイーがリラックスした時に，「ナラティブ生成質問」を行うように注意を払った。なお，インタビューは，インタビュイーが住んでいる町，仕事場から近いところ，もしくは，インタビュイーの希望する場所で行うことにした。

2　本研究における「ナラティブ生成質問」の抽出は，桜井，小林（2005）と Hermanns（1995）による「ナラティブ生成質問」の例を参考にした。

2．2．「日本語人生」を記述[3]する

分析にあたり最も重要なことは，彼らの「日本語人生」を丁寧に記述することであると考え，トランスクリプトにも注意を払った。インタビューの書き起こしはなるべく逐語を心がけ，語り手の語りだけでなくインタビュアーの質問や相槌，インタビュイーの感情が表れる表現，さらに，インタビュアーである筆者が気づいたインタビュイーのしぐさや表情，場の状況などをも記録するとともに，目で見，耳で聞き，肌で感じた全てをフィールドノーツにつけた。また，インタビューの書き起こしの内容をなるべく早い段階でインタビュイーに確認を行い，直ちに分析を行った。本研究では，「ストーリー自体を調査の対象として扱う特徴があり，単に，言語によって示された内容を見るのではなく，語りをなるべく切り刻まずに，語りの流れや全体的な形を大事にしながら，ナラティブの時間的な進行という文脈で捉えられている」（フリック，1995/2002，pp.252-255）というナラティブ分析を用いた。まず，語りを「意味があるとされる出来事」を提示しながら内容の構造的記述を行い，次に，時間の流れに沿ってインタビューの分節化を行いながら図式化した。

従って，本稿でも，語りの中から「意味があるとされる出来事」やフィールドノーツの記録を提示しつつ論を進めていくことにする。なお，語りからの引用は〈　〉で表記する。

3　記述にあたり，桜井，小林（2005，pp.135-138）と，ザトラウスキー（1993，pp.59-60）を参照し，トランスクリプトのルールを設けた。「＝は発話の連続，…は沈黙でドット１つは１秒を指す。―は長音，？は上昇のイントネーションを示す。また，〔　〕は補足説明であり，（（　））はインタビュー場面の状況や，語り手の表情や聞き手が気づいたことの説明である。｛　｝は非言語的な行動，例えば｛笑｝。↑はインタビュイーからの質問を意味している。」

2．3．インタビュイー[4]

日本語学習者の「日本語人生」を聞かせてもらうには，インタビュイーの自発的な調査参加意思が重要であると考え，インタビュー調査の趣旨，及び調査遂行の倫理性，録音や調査対象者のプライバシーの保障を伝えた「インタビュー依頼書」を都内の大学，専門学校，日本語学校に配布した。その後，インタビューを希望する人からのみ連絡をもらうこととし，そのお礼とともにインタビューの日時，場所の確認をするなど，Eメールを通して連絡を取った。

本稿では，トドイさんの「日本語人生」をとりあげるが，彼女は，筆者が「日本語人生」という枠を立て研究を行った初期の頃のインタビュイーである。特に，彼女の「日本語人生」に注目した理由は，日本語との出会いをある日突然訪れた素敵な出来事であり，〈運命〉であると語ったことが印象に残っており，何より，その〈運命〉のような「日本語」の変化と，その中で語られる「日本語」の意味に注目したからである。

「午後の紅茶でも飲みながらどうですか」という彼女の提案で，インタビューの時間は午後2時，彼女が通っている大学のラウンジで行った。「日本語人生」という用語がとても気にいったこと，そして，自分の人生において日本語はとても大きな意味を持っていることが，インタビューへの応募理由であると述べながら，〈運命〉であったその「日本語人生」を語り始めた。

3．〈運命〉の選択

成田空港についた時，なぜかお香の匂いがした。そしてとてもふわふわした綿の上に舞い降りたかのように良い気持ちだった，とトドイさんは自分が好きな言語が使われる日本という国へ初めて来た時の感想を嬉しそうに話し始めた。トドイさんは，法律を学びたかったが3度も受験に失敗をし，仕方なくドイツ語を専攻するようになった。だが，その生活は無味乾燥な日々だった。しかしある日，大学のキャンパスの掲示板の中に「日本語教室」の広告のチラシを見つけた瞬間，なぜか胸が熱くなってきて，そのチラシから光のようなものすら感じた。そして，その日本語教室にさっそく連絡し，公開講座に参加した。

> なぜかわからないけど，なんか，活発な―・・・生きている感じがしたんです。その教室の中から。あ―，生きていることってこのようなものなのかなあと・・・。それは運命でしたね｛笑｝。それで，その時から法学から日本語にスイッチが切り替わったかもしれない｛笑｝，朝から晩まで日本語を勉強しました。

そこで感じた熱気，生き生きした感じをトドイさんは今も忘れることができない。日本という国は歴史の教科書で接したことはあったが，日本語にひらがなやカタカナがあることすら知らなかったというぐらい日本語に関しては無知で興味もなかった。しかし，引き込まれるように，「日本語」という〈運命〉の選択をすることになる。

トドイさんは，1999年3月から日本語を勉強し始めたが，ひらがなもカタカナもわからない，いわゆるゼロビギナーだった。見たこともない文字―ひらがな―が可愛いらしく感じられた。その文字を覚えることがとても楽しかった。日本語学校で，大学の選択科目で，そして一人で，がむしゃらに日本語を勉強した。日本語の授業だけではなく，他の授業のノート筆記も日本語で行った。日本語で書けない部分は韓国語で書き，帰宅してからわからなかった部分を調べて勉強した。他の人のように韓国語で説明が書いてある「韓日辞書」や「日韓辞書」は使わずに，日本語で説明が書いてある辞書で勉強した。そのため，一つの単語の意味を知るのにかなりの時間を要した。しかし，毎日の勉強が苦ではなかった。何か目標があったわけではない。ただ，どうすれば自分が好きな日本語を早く習得できるのか，それが楽しみであっただけだった。

4　トドイさん（28歳，女性，韓国）：本稿では，プライバシーを守るため仮名を使うことにする。インタビューは，2005年10月17日の月曜日，2時間ほど行われた。年齢や職業は，そのインタビュー時のものであり，当時東京都内の大学院で言語学を学んでいた。インタビューは主に韓国語で行われたため，筆者が日本語で訳し，トドイさんに確認してもらった。
なお，トドイさんのインタビューは1回だけであった。疑問に思うことをもう少しインタビューを重ね聞きたかったが，当時の彼女は進路のことで悩んでおり，再びインタビューを行う状況ではなかった。その後は，トランスクリプトの確認などEメールを通じ連絡を取り合った。

> このコーヒーはおいしい・・・((とてもゆっくり話しながら))。コーヒーは苦い・・・。ミルクが―入っている・・・おいしいという一つの単語の中にいろいろな意味が含まれていますよね{笑}。私は新しい単語を知っていくことがとても楽しかったです。

日本語の勉強が楽しいと思ったトドイさんは，早朝に日本語学校で上級日本語を受講し，昼は大学で日本語の授業を受け，夜はまた日本語学校で中級科目を受講する日々を過ごした。専攻したドイツ語は単位取得のための最低限の勉強だけで，毎日，学校の自習室では日本語の勉強に励んだ。その1年間，トドイさんが勉強しながらつけた単語帳は10冊にも及んだ。そして，いつの間にか上級レベルに達し，1999年3月に日本語を学び始めたばかりなのに，その年の12月に行われた日本語能力試験で，300点に近い点数で1級を取得した。

> 日本語ジャーナルが出版された号から始めて，日本語ジャーナルの現在のものまで毎日，それを3冊ずつやりました。その中にはドラマとか全部ありますよね？・・・それと，日本語学校での授業の復習をしましたね。24時間，寝る時間以外は日本語の勉強をしました{笑}。その時間が私にはとても大切だったんです{笑}。

どのように日本語を勉強してきたのか，その時間がとても大切だったと，楽しそうに語るトドイさんはとても生き生きしていた（フィールドノーツより05.10.17）。

日本語能力試験の1級を取ったその翌年，地元でIT産業フェスティバルが開催され，〔自国の〕日本語学校の院長先生から市庁の関係者の中に知り合いがいるから通訳してみないかと誘われた。その時，初めて通訳の仕事をしたが，それが後に通訳を勉強しに日本に来るきっかけとなる。トドイさんは大学卒業後すぐに留学はせず，貿易会社に就職した。留学したいという思いはあったが，兄弟が二人とも大学生だったため，親に経済的な負担をかけたくないという理由で，その思いを親に伝えることができなかった。しかし，留学したい，もっと日本語を勉強したいという思いが日々募ってきて，社会人としての生活を楽しく感じることができず，会社を一歩出ると涙がこぼれる日々を送っていた。

> 半年間，そんな仕事をして―，・・・やめて，ちょうど，そのとき，私が通っていた日本語学校に先生が必要だと言われ日本語講師をするようになりました。・・・2001年に日本に来たから，〔日本語教師の仕事を〕約半年間くらいやりました。そのときは日本語の初級クラスで文法，ひらがなから敬語まで教えました。最初は1つのクラスを任されたけど，辞めるときはクラスが3つまで増えました。

そして，2001年3月にやっと日本に来ることができ，2年制コースの通訳専門学校に入学した。だが，その生活もまた彼女の期待以下だった。

> 私は通訳を勉強しにきたのに，通訳の時間は週に1時間しかなかったんです。その後はほとんど文型積み上げ式で，歴史とかも習いました。先生たちも専門家ではなく，昔はみんな通訳ガイドをやった人が多かったんです。なぜかおじいさんが多くて{笑}。専門学校のシステムと私は合わなかったんです。＝それで専門学校ではなく，大学院に進んだほうがいいと思い始めました。私はインターネットを調べて先生を探して，A大学の研究生として入る決心をしました。私はその先生に手紙を送ったんです。そして，1週間後にその先生のところへ伺ったんです。そしてまたもう一度伺って―。

日韓ワールドカップの熱気がまだ冷めやらない2002年の秋，念願だったA大学に研究生として入ることができた。そして，その後大学院に進学し，言語学を学ぶことになる。

4. トドイさんが語る「日本語」の意味から

トドイさんの話を聞いていると，日本語の勉強もその生活もとても楽しんでいると思えた。不便

なことはあるかもしれないが，決して不満などはないだろうと思ったほどである。しかし，トドイさんはゆっくりではあるが心の奥の話を語り始めた（フィールドノーツより 05.10.17）。生きている感じがし，〈運命〉のようだった日本語が，相手に自分の色を見せたいと思いながらも見せられない日本語になったことを語り始めたのだ。

> 私は話したいことがあっても話さないです。・・・我慢する。私は虹色をすべて見せたい。でもそれができないから抑圧されている私で息が苦しい時がある。でも，それを無視することが多いです。

トドイさんが語る「運命のような日本語」が，〈我慢〉の日本語になってしまったことに正直驚いてしまった（フィールドノーツより 05.10.17）。なぜ，〈我慢〉をしなければいけないのか。虹色を見せたいというのはどのようなことか。トドイさんが語る「日本語」の意味からその実態を探っていきたい。

4．1．〈最高の日本語〉

純粋に楽しんでいた日本語の学習において，いつの間にかある目標が芽生えてきた。それは，〈日本人が話すような日本語を話す〉ことだった。トドイさんは，韓国語で話せることは日本語でも話せるようにしたいと思った。

> たとえば，テープを聞いている時，テープの中の日本人の声が「わ・た・し」だと言います。その時，私の発音が「ワ・タ・シ」だったら「わ・た・し」が私の目標になります。
> そのとき，「わ・た・し」だと，私がその発音ができたら，それが私の自己達成感になります。そしてその瞬間だけではなくて，日本語を話し考える瞬間にその発音が自然に発音できるようになることが，そして，ずっと言えるようになることが私の自己達成感に繋がるんです。

さらに，テープから流れる日本人の発音を真似し，そのように言えることを目標とするだけではなく，たとえ仮想であっても常に場面を設定し，日本人と会話をする状況を作り出し，この時にはこの日本語を，という練習を何度も何度も繰り返し行った。

> 私は日本語で話したい時，話す相手がいない時には，仮想の人物を作ります。例を挙げれば，今話をしていても頭の中では，((ドアのほうを指差しながら)) 今，誰か日本人が入ってきた。私のカバン見てないと聞かれたら，私は日本語でこうこう話そうと考えます。なんといえばいいのか，仮想なんだけど，私の頭の中では現実なんです。頭の中では―。

レストランでアルバイトをしていた時，客に「あなたは京都出身ですか」と言われたことがある。しかし，「京都出身」というのは，日本人のように自分の発音がいいという意味にもなるが，京都へは行ったこともなく，ずっと東京で生活している自分の発音が結局はよくないということではないかと思い，微妙な気分になった。その後，音声学の授業を受講した際に，京都出身の日本人と自分の発音を実際に比較分析してみた。

> 私の音に高低があまりない，平板化していることがわかりました。とてもショックというか，びっくりしました。私がこんな発音をしているんだと・・・。

トドイさんは，自分が目標とした日本語，〈日本人が話すような日本語〉を目指して頑張ったと語った。そして，その「日本語」に近づいたと感じたら嬉しくなり，〈自己達成感に繋がる〉とも語った。〈日本人が話す日本語〉が話せるようになること，それはトドイさんにとって〈自己達成感〉に繋がっていく。しかし，自分の「日本語」について十分に満足していたわけではない。アルバイト先でのエピソードを話しながら，日常生活における自分の日本語能力についても語り始めた。日本人は遠慮深く，礼儀正しいと習ったが，初めて付き合った日本人は違っていた。ファースト・フード店でアルバイトをしていたが，店長がおかしい人だった。留学生と日本人の差別があって，休憩の時も日本人には「ゆっくり休んで」とか言うけど，外国人達が休むと「もう休み時間なの？」と言う人だった。2 か月でそのアルバイト

を辞めることにしたが，その時，殴り合いまではいかなかったが，初めて日本人と喧嘩をした。

> 喧嘩といってももちろん言いたいことをすべては言えなかったです。ただ，初めて日本人に言語で攻撃されたんです。人身攻撃のような・・・。この子おかしいと―。・・・その言語は日本語だったけど，私が知っている日本語ではない気がしました。なんか，その時，私は，言い返せなかったです。

トドイさんは，日常生活において〈不便〉な点はないが，〈不満〉はある。それは，日本語の成長のスピードが落ちている気がしているということだった。店長に言い返したいけれど言い返せなかったことも，成長のスピードが落ちている自分に問題があったからだと語った。そして，自分の日本語能力をマラソンに喩えた。マラソンでもスピードを出してから遅くすることは易しいが，速度を落としてからスピードをまた上げるのは難しいということだった。その時点の日本語は，速度を落としてから再度上げるところだと彼女は感じていた。そして，日本語において自分は〈最上級〉にいると思っているが，〈最高〉のところにいるとは思わないと語った。そして，筆者の顔を見て，こう問いかけた。

> 今も私は最上級ですが―。最高がいるんじゃないですか↑

「だれですか」と思わず問い返した。するとトドイさんは，誰なのか具体的な人物はわからない，ただ〈最高〉の存在はいると，そう感じていると答えた。そして，その存在を乗り越えることはできないと続けた。しかし，トドイさんが語る〈最高の存在〉も，〈自己達成感〉に繋がるという思いも，結局，その裏に到達する目標が存在するからこそ，ということが語りからうかがえる。それは，学習の際に目標にしていた〈日本人が話すような日本語〉である。トドイさんが語る〈私が知っている日本語〉とは，彼女が目標とした〈遠慮深く，礼儀正しい日本人〉が話す日本語を指しているのではないか。トドイさんは，具体的にはイメージできないが存在していると考える〈最高〉の日本語を目指して頑張ってきたのであった。

4. 2.「言えない日本語」「言わない日本語」

プレゼントを渡す時にはいつも「つまらないものですが…」と話しているトドイさんは，定型的な表現以外に何を言えばいいのか分からない時がある。

> う――ん―。プレゼントを貰ったとき・・・決まっている言葉以外に―・・・この言葉以外に何を言えばいいのか分からないです。日本語ではその言葉しか習ってないし，その決まっている言葉を使うのが，その人との人間関係をうまく持っていけることだから。

プレゼントを渡す時に，日本人は「つまらないものですが…」と言いながら渡すと習った。しかし，自分がプレゼントを貰う時にはどういえばいいのかわからない。「ありがとう」だけでいいのかどうかわからない。トドイさんにはそれが悩みの一つでもある。豪華なものでも「つまらないものですが…」と言わなければならないのかと思った時もあったが，日本語では定型的な表現を使うのがその人との〈人間関係をうまく持っていけること〉だから，いつもその言葉しか使わないということである。

ここで，トドイさんの語りで注目したいのは〈その人〉という登場人物である。不特定の相手であるが，それが「日本人」を指していることが続く語りからうかがえるだろう。

> 私は・・日本人とのコミュニケーションの場合，とても意識しています。今この人にこのような言葉を言うと，このように思われるのかと意識します。一つ一つの言葉にとても気を使っています。でたらめな日本語は使いたくない・・。う―ん，日本人と話す時になぜ私が日本人にマイナスのイメージを与えないようにするのか，分からないです。なるべく相手によいイメージを与えたい。((首をかしげながら))・決まり文句がたくさんあるからかなあ{笑}。

トドイさんが語る人間関係をうまく持っていくこととは，相手にマイナスのイメージを与えないことでもある。場面によっては，定型的な表現を使用することがコミュニケーション上有効な時もあるが，どんな場面でも有効であるとは限らない。そのため，ある場面で一つの表現しか使用しない自分のコミュニケーションの取り方が次第に気になり始めた。しかし，相手にマイナスのイメージを与えたくないと意識してしまうため，コミュニケーションに全く支障はないレベルなのに，話したいことがあっても表現できない時が多くなっていく。トドイさんは，ある場面で一つの定型的な表現しか使用しない自分の日本語を成長のスピードが落ちていると考え，その状況を〈定型化している〉と語るのである。

> それで，日本語で話す時はとても私を定型化している気がします。日本語の枠の中に私を当てはめている気がします。それでこの人と会う時はこの色を，この人と会う時は私のこの色を見せます。日本人といる時は私の虹色の中で赤色だけ見せたり，この人には私の虹色のなかで青色だけ見せたりします。そんな気がします・・・。

自分が持っている〈虹色〉を見せることができないというトドイさんは，話したいことを〈我慢〉するようになる。韓国人には自分の〈虹色〉を見せることができる。ある時には，〈虹色〉の中から色を選んで混ぜて色を作ることもできる。しかし，日本人には〈虹色〉の中で，ある人には赤色だけを見せ，ある人には青色だけを見せるという気がしている。トドイさんは，自分にとって損がなければ，結局話したいことがあっても伝えないことを選ぶのである。

> 日本にいる時は二分化されている私を感じます。とても明るい私，とても枠の中に入っている私を感じます。私の中です。それが共存している。でも，その共存している中で自由な私と枠の中に入っている私が強くなったり弱くなったりしています。私は話したいことがあっても話さないです。・・・我慢する。私は虹色を全て見せたい。でも，それができないから抑圧されている私で息が苦しい時がある。でも，それを無視することが多いです。

生きている感じがし，〈運命〉のようだった彼女の日本語は，人に自分の色を見せたいけれど見せられない日本語となっていく。多くの表現を持っていても，自分を語れない，言いたいことがあっても言えなくなったことで，抑圧され，苦しみを味わっている。しかし，そのような自分を無視し，〈我慢〉することしかできないと語るのである。

5.「二分化された日本語」の問題

トドイさんが語る，〈とても明るい私〉，〈枠の中に入っている私〉という〈二分化されている私〉とは，「自分の日本語」と，「日本人の日本語」というように「二分化された日本語」であると言い換えられるだろう。本章では語りが語ることについて考えてみたい。

まず，最上級ではあるが最高ではない「自分の日本語」と，最高である「日本人が話す日本語」という「二分化された日本語」が存在するからこそ，「二分化された自分」を感じることになってしまうのではないかという問題である。

トドイさんが語る日本語の中には「二分化された日本語」が確かにある。一つは最上級ではあるが最高ではない「日本語」である。しかし，その日本語は日本人に理解されない場合，〈でたらめな日本語〉になってしまう「自分の日本語」である。もう一つは乗り越えられない〈最高の日本語〉である。トドイさんは，日本人が理解できない，つまり話した時，日本人に「はい？」と聞き返される日本語は〈でたらめな日本語〉で，そのような日本語は使いたくないと話していた。そして，ある場面では決まっている表現を使うことによって，日本人にマイナスのイメージを与えずに，その人間関係も維持できると思っていることがわかる。トドイさんがはみ出すことができないと考える〈枠〉とは，日本人にマイナスのイメージを与えず，人間関係が維持でき，また，でたらめな日本語にならない〈日本人が話すような日本語〉という〈枠〉であろう。しかし，そのような〈枠〉の中では満足できず，ストレスを感じてしまう。そして，そのストレスや悩みを解消するために，日本人のような日本語をさらに目指してい

くことになる。しかし，その結果にもまた満足感を感じることはなく，未だ「最高」に到達できない「自分」を感じるだけという悪循環が起こる。

このように，コミュニケーションで感じるストレスや悩みは，結局「自分」と密接な関係があることがわかる。日本人とのコミュニケーションで言いたいことがあっても言えず，自信がないと語る学習者にとって最も大きな問題は，場面に合った日本語を話せても，そこに自分らしさが欠如してしまうということである。

トドイさんは，韓国で勉強していた時に感じなかったことを日本での生活の中では感じることが多い。韓国にいた時には自分の頭の中で作り上げた世界で日本人とコミュニケーションをしていたため，楽しむことができた。しかし，日本で学校に通ったり，アルバイトをしたりしながら，実際に日本人と接すると戸惑うこともある。頭の中で作り上げた世界とは異なる「現実の世界」に気づく。アルバイト先で自分が好きな言語で初めて攻撃を受けた時，自分が好きだった日本語ではない気がしたという語りからもわかるように，トドイさんにとって頭の中の世界と現実とのギャップの差を埋める手段は，〈決まっている言葉〉だったのかもしれない。しかし，言いたいことがあっても〈我慢〉し，言わないという理由は，定型的な表現だけの問題ではなく，その中に潜む意味と関係していると思われる。

トドイさんが「日本人」とのコミュニケーションを意識せざるを得ない理由は，日本人のような表現，日本人が理解できる表現を追求しなければならない状況に置かれてしまうからではないか。「日本人の日本語」「外国人の日本語」という「二分化された日本語」の問題は，コミュニケーションにおいて自分らしさを感じることができなくなることであると考える。

6. おわりに

〈とても明るい私〉を感じられるのは，母語で話している時だけなのだろうか。日本語を通して〈とても明るい私〉を感じることもできるのではないか。〈運命のような日本語〉を語る時のトドイさんはとても生き生きしていたことを筆者は今も覚えている。トドイさんが語る〈虹色〉というのは，多様な表現のみを指しているのではない。獲得した表現を適切に使うことが〈虹色〉を見せることでもない。「色」というのは，自分が言いたいことや自分の感情・考えなど，各々が持っているものである。だからこそ，それらを表すための日本語が必要である。その日本語とは，自分らしく感じる日本語であり，自分が言いたいことを表現し，また自分にとって意味のあることを表現するなど，「私」の〈虹色〉を全て見せることができる「日本語」である。つまり，その「日本語」は，「日本人の日本語」でも「外国人の日本語」でもない。「私の日本語」である。

筆者は，日本語教育には様々な日本語があってもよい，という考えの下での日本語教育によって，初めは一つの外国語でしかなかったかもしれない「日本語」が，意味のある「日本語」になっていくと考える。学習者にとっての「日本語」は，日本人と話すための日本語でもいい，仕事をするための日本語でもいい，日本人の友達を作るための日本語でもいい，アニメや漫画を読むための日本語でもいい，その時の日本語が「日本人のために」ではなく「自分のために」と感じられること，それが「自分の日本語」である。そして，その日本語を使用することによって日本語学習者は，コミュニケーションを行う中で自信を持つようになったり，人とのコミュニケーションを楽しむようになったり，自分の「日本語人生」を豊かにしたりしていくことが可能になると考える。

当初，本研究における「日本語人生」という概念は，インタビューを聞くための枠でしかなかった。しかし，トドイさんの語りに出会い，彼女が選択した日本語を〈運命〉であると思ったように，彼女の人生において非常に大きな意味を持つようになった日本語は，人生の中にすでに組み込まれていることに気付いた。だからこそ，生きていると実感できる「日本語」を通して，学習者の人生を豊かにしていけるような「自分の日本語」が日本語教育で必要であると考える。それが言語教育のあり方であり，そのようなコミュニケーション教育の必要性が，学習者の「日本語人生」で語られているのである。

文献

大久保孝治（2009）.『早稲田社会学ブックレット── 社会調査のリテラシー 6. ライフストーリー分析── 質的調査入門』学文社.

桜井厚, 小林多寿子（2005）.『ライフストーリー

インタビュー――質的研究入門』せりか書房.
ザトラウスキー，P.（1993）.『日本語談話の構造分析――勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版.
中野卓･桜井厚（編）（1995）.『ライフヒストリーの社会学』弘文堂.
フリック，U.（2002）.『質的研究入門――〈人間の科学〉のための方法論』（小田博志，山本則子，春日常，宮地尚子，訳）青秋社（Flick, U. (1995). *Qualitative Forschung*. Hamburg: Rowohlt.）.
やまだようこ（編）（2007）.『質的心理学の方法――語りをきく』新曜社.
Hermanns, H. (1995). Narratives interview. in U. Flick, E. von Kardorff, H. Keupp, L. von Rosenstiel & S. Wolff (Eds.), *Handbuch qualitative sozialforschung* (2nd ed., pp.182-185). München: Psychologie Verlages Union.